4　讃岐国府跡探索事業

「香川県文化芸術文化振興計画」に基づき平成 21 年度から開始した讃岐国府跡探索事業は、平成 29 年度で終了し、平成 30 年度から新たに讃岐国府探究事業を 3 年計画で実施している。主な調査事業として讃岐国府跡の遺構内容の確認を目的とした発掘調査を実施した。今年度は、国史跡に指定された開法寺東方地区とは別の主要施設が存在すると想定されている場所で発掘調査を実施した。調査の結果、大型の建物跡などと、これらが設置された施設の東側を区画する 2 条の溝跡が見つかった。

また、讃岐国府跡を活用した情報発信事業として、現地説明会や小中学生対象の発掘体験などを開催した。

(1) ボランティア活動

・登録人数　　20 人

・延べ人数　　85 人

(2) 地域との交流

内　　容	実　施　日	参 加 人 数
第 21 回　水のフェスティバル in 府中湖「道真の里を歩く」	10 月 5 日	100 人
第 21 回　水のフェスティバル in 府中湖　展示「讃岐国府跡を探る 10」	10 月 6 日	6,000 人

第 21 表　地域との交流一覧

(3) 情報発信

内　　容	回　　数
ホームページへの記事掲載	6 回
情報誌「いにしえの讃岐」への記事掲載	1 回
新聞への連載記事掲載	2 回
新聞への記事掲載	10 回
テレビ出演	9 回

第 22 表　情報発信一覧

(4) 関連行事

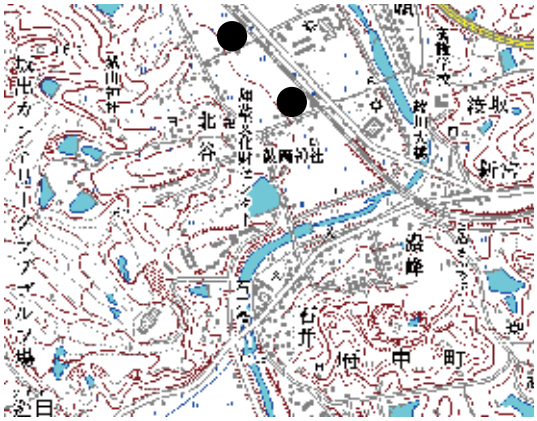
行　事　名	会　　場	実　施　日	参加人数（人）
讃岐国府跡を探る 10	高松市讃岐国分寺跡資料館	5 月 21 日～ 7 月 7 日	458
讃岐国府跡を探る 10	三豊市宗吉かわらの里展示館	7 月 17 日～ 8 月 25 日	942
讃岐国府跡を探る 10	府中湖カヌー研修センター	10 月 5・6 日	6,000
讃岐国府跡を探る 10	坂出市郷土資料館	11 月 6 日～ 11 月 28 日	120
讃岐国府跡を探る 10	観音寺市中央図書館	12 月 3 日～ 12 月 15 日	200
讃岐国府跡を探る 10	香川県立図書館	1 月 21 日～ 3 月 1 日	1,101
讃岐国府跡を探る 10	坂出市役所	2 月 17 日～ 3 月 6 日	800
讃岐国府跡を探る 10	綾川町立生涯学習センター	2 月 18 日～ 3 月 5 日	1,438
善通寺市文化財保護協会総会講座	善通寺市総合会館	5 月 15 日	30 人
丸亀市立中央図書館歴史講座	丸亀市生涯学習センター	5 月 19 日	40 人
坂出市文化協会 45 周年祝賀会記念講演	坂出グランドホテル	5 月 26 日	50 人
讃岐国分寺跡資料館友の会講演会	讃岐国分寺跡資料館	6 月 1 日	28 人
讃岐国分寺跡資料館友の会史跡めぐり	讃岐国府跡周辺	10 月 26 日	15 人
府中壮生大学講座	府中老人いこいの家	11 月 14 日	72 人
香川大学地域連携推進プロジェクト支援事業	讃岐国府跡周辺	11 月 30 日	29 人
遺跡にふれてみよう！～讃岐国府跡～	讃岐国府跡周辺	12 月 7 日	14 人
香川県図書館大会研修	香川県立図書館	1 月 31 日	25 人
讃岐国府跡現地説明会	讃岐国府跡発掘調査現場	2 月 9 日	220 人

第 23 表　関連行事一覧

（長井）

(5)　讃岐国府跡第 37 次調査成果の概要

遺跡名　　讃岐国府跡
調査主体　香川県教育委員会
調査担当　香川県埋蔵文化財センター
調査期間　令和元年 10 月～令和２年３月
調査面積　154㎡
出土遺物　コンテナ数 90 箱
　　（土器・瓦・金属器・木器・自然遺物）



第 18 図　遺跡位置図（1/25,000）

調査の経緯

香川県埋蔵文化財センターは、平成 21 年度から平成 29 年度まで「讃岐国府跡探索事業」を実施し、讃岐国府跡の発掘調査を継続してきた。平成 30 年度以降も、讃岐国府跡調査事業として発掘調査は継続されており、讃岐国府跡の広がりの把握や、これまで主要施設が推定されていた部分における内容確認を目的として発掘調査を行っている。令和元年度に行った 37 次調査においては、これまでに施設が推定されていた地点において、地形や溝といった遺構からその東辺が判明したほか、区画内で建物などが検出されており、讃岐国府内での施設配置やその内容についての知見を得ることができた。

地点 1

37 次調査は、地点１、地点２の２つの地点において調査を行った（第 19 図）。地点１とした範囲は、南で行われた７次調査において、築地塀に伴う可能性のある溝が検出されたほか、北側の６次調査では８世紀代の総柱建物が検出されている。かねてから讃岐国府の中の施設の存在が想定されている範囲であり、築地塀や出土遺物の内容からも、国庁の有力な候補地の一つである。それらの施設を囲む区画施設の内容について確認するために４本のトレンチを設定している。

37 － 1･2 区については、最大３面の遺構面が確認された。現耕作土より 0.6 m程下で１面は確認され、１面を構成する層は、中世後半～近世初頭までの造成土である。造成は１面より上面においても継続して行われ、現在の地表面で行われる耕作まで続くものと考えられる。１面ではほとんど遺構は確認されないものの、調査区の東端付近で、現在の地割に沿う形で溝が確認される。溝の埋土には流水の痕跡があり、耕作などに伴う水路と考えられる。現在でも調査地点の東には水路が流れており、それらの前身にあたる水路と考えられる。

１面を構成する造成土下には、黒褐色の粗砂混じりシルト層が確認された（６層）。６層と同様の層は各調査区で堆積厚に差はあるものの確認され、これまでの周辺の発掘調査においても確認されている包含層（香川県教育委員会 2016）に相当するものと考えられる。遺物を多量に含み、古代の遺物も多く含むが、その下限は 13 世紀後半～ 14 世紀前半に比定される。６層堆積以前と以後の土地利用のあり方が著しく異なることから、この層の形成段階において、周辺も含め土地利用の大きな変革があったことを示しており、６層の堆積後に当地域における耕地化が進められたと推測する。

６層除去後に２面を確認した。遺構は小規模な柱穴や溝が大半である。出土遺物については、11 世紀～ 13 世紀までのものがあり、古代末～中世前半の遺構が中心となる。調査範囲内で建物を１棟のみ

復元できたが、全体として柱穴等の密度は低い。２面を構成する層を７層とした。７層は、古代末までの遺物を少量含む。２面の遺構の年代から考えても、10 世紀後半～ 11 世紀前半に形成された層である可能性が高く、層中にブロック土を含むことや、面的に広がり、基盤層の標高が低い地点において層厚が厚くなることからも、整地などの目的で施工された可能性が高い。

７層除去後に、３面を検出している。３面では基盤層が確認されるが、基盤層についても、少量のサヌカイト製打製石鏃や剥片を含むため､さらに下層に縄文時代の遺構が存在する可能性がある。ただし、保存目的の発掘調査のため、古代の遺構面以下の掘削は行っておらず、詳細は不明である。

３面では、柱穴・溝・土坑等の遺構が確認された。溝はいずれも現在の地割と同方向で、南北方向に延びる。37 － 1，２区のいずれも確認されているＳＤ 1038 やＳＤ 1041、ＳＤ 2010 とＳＤ 2034 や、それ以降に形成されたＳＤ 2026 が近似した位置で確認できる。それぞれの遺構の時期については、いずれも出土遺物が僅かであるため不確定であるが、９世紀以降の埋没が想定される。特に２条並行するように検出されたＳＤ 1038 とＳＤ 1041 については、それぞれ近い時期の開削を想定し、同時併存していた可能性も考えられる。溝の間の部分については、７次調査で確認されていたような、基壇状の高まりを有しているとはいいがたく、築地塀状の遺構を本調査地点の状況のみで判断することは難しい。ただし、本調査区における遺構面が、７次調査での遺構検出面と比べて 0.3 ｍ程低いこともあるため、それらが削平された可能性も残る。７次調査と 37 次調査において、溝の底面のレベルがおおむね共通することからも、これらの溝が同一の時期の施設を区画していた施設として評価することも可能であろう。

このほか、37 － 1 区では、これらの溝に先行する溝状の土坑（SD1042）も検出されている。一辺４ｍを超える隅丸方形の土坑であり、埋土は黒褐色の粘質土である。出土遺物からは、８世紀前半の埋没が考えられるが、遺物量はさほど多くない。後述する建物との関連も想定されるが、機能については不明である。

３面は調査区東側に地形の急激な落ち込みが確認される。２面まででも、調査区の東側に向かうにつれて、遺構面の標高は下がる傾向にあるが、３面においてそれは顕著であり、落ち込み内に堆積した埋土から古代の遺物が確認されるため、３面の遺構の時期には、地形の埋没はかなり進んでいたと考えられる。地形の落ちのラインは、37 － 1・２区間で条里型地割に近い方位で直線的につながることや、落ちの傾斜角度が、西側丘陵から延びる旧地形の傾斜よりも急になることからも、旧地形に人為的な改変が加えられた可能性が高く、落ち込みより西側での施設の設置に伴う可能性を想定しておきたい。

37 － 3 区は、37 － 1・2 区で検出された区画施設の北辺を確認するために、南北方向のトレンチを設定して調査を行った。区画施設の北辺について確認することはできなかったが、37 － 1・2 区で区画されたと考えられる施設の内容の一端が判明したほか、従来低地帯を介在して２つの施設が存在するとされていた範囲について、それらが同一の施設となる可能性が高くなったことが成果として挙げられる。

基本的な堆積状況は前２つの調査区と同様であるが、37 － 3 区では７層に相当する層が僅かにしか確認されない。基盤層が確認されるレベルが 37 － 1・2 区より高いため、削平を受けたと考えられる。

１面に相当する遺構は確認されない。２面の遺構については、柱穴、溝、土坑などが検出された。溝は、現在の地割方向よりやや東側に振れる形となっている。柱穴も数基確認されているが、建物を復元することは難しい。

３面では、柱穴や溝が確認された。古代の柱穴については、複数時期の建物を復元することができ、建物は１～３の３棟が復元できる。

建物１は、最も古い建物である。柱穴列が南北方向に７穴、東西方向に３穴確認される。建物内部にも、束柱と考えられる柱穴が検出されている。柱穴の平面形は隅丸方形で、一辺約 1.0 ｍを測る。埋土は黒褐色シルトで、粗砂を部分的に含む。柱痕が明瞭に確認できるものでは、直径 0.3 ｍ程であり、一部柱材が残る。柱穴の深度は、0.4 ｍ程で、上面は削平を受けている可能性がある。柱穴の芯々間の距離は、梁行、桁行共に 1.8 ｍである。柱穴列の南側及び西側には、溝が巡る（SD3021）。溝の検出幅は 0.4 ｍで、深度は 0.2 ～ 0.3 ｍを測る。柱穴列の屈曲に対応することや、そのほかの遺構との切り合いから考えても、溝は建物１に伴うと考えられる。なお、建物１の時期は、柱穴掘方から出土した遺物と、建物１の柱穴を切る遺構（SD3017）の年代から、８世紀前半～中頃のものであると考えられる。

建物２は、建物１に後出する建物である。柱穴が２穴しか確認されておらず、東西棟か南北棟か定かではないが、現状東西方向に２穴並ぶ柱穴より南側に対応する柱穴は認められず、北側に建物が展開する可能性が高い。掘方の埋土は灰白色のシルトで粗砂を含む。かつての低地帯であったために地下水位が高く、柱材が明瞭に残されていた。柱材は断面円形であり、外面には面取り状に削られた加工痕が残される。

建物３は、建物２とほぼ同位置に建てられた建物である。柱穴の規模は、検出のみでとどめているため平面規模は明らかではないが、建物２の柱穴とほぼ同様のものであると考えられる。

建物２、３については、その年代を示す遺物は出土していないものの、建物１との関係から、８世紀後半～９世紀の年代を推定しておきたい。

また、建物に先行する遺構も確認されている。部分的な調査しか行っていないものの、柱穴や溝の方向が南北方向を指向するため、これまでの調査成果を参考にすると、７世紀末の年代が想定される。今回調査においては、この時期に相当する遺構の密度はさほど高くない。

小結

地点１の調査では、微高地上に位置するエリアの東辺を区画する施設が確認され、その内部の状況が判明した。７次調査で検出された築地塀との区画施設の連続性や、性格の一致については、溝の底面のレベルが近似することや、溝の芯々間の距離が類似することからも、関連する可能性が高いが、これらの展開する範囲や北側の状況の解明は今後の課題として残る。これらの溝に囲まれた微高地は、周辺の発掘調査の所見からも、一辺 100 ｍ程は地形面が連続する可能性が高く、この内部に施設が存在することがさらに確かなものとなった。建物の規模・性格の把握についても課題が残るが、今回調査で検出された建物と、６次調査で確認された建物については、柱間の距離や年代の面からも関連性も考えられる状況であり、これまでの調査成果の再検討にもとづき、今後の調査・研究を進めていく必要がある。

地点２

地点２は、現在の周知の埋蔵文化財包蔵地「讃岐国府跡」の北辺部にあたる。地点２の周囲では、８次調査において面的な調査が行われており、調査の結果、顕著な古代の遺構は確認されていないものの、墨書土器や施釉陶器といった特徴的な遺物が包含層から多く見つかっている。近隣にそれらの器物を用いた施設が存在する可能性が高いと考えられ、それらの施設の所在や内容を確認するために調査を行った。

発掘調査地点は、８次調査地より北側の丘陵から派生する微高地の縁辺にあたる。地点内では、調査

箇所以外でも、須恵器・土師器片が全域で採集される。調査区は、現在の地割と同一方向で、南北方向に設定している。

調査区の堆積状況としては、表土下に耕作のための造成がなされている。造成土の下からは、包含層が確認される。遺物をあまり含まないが、中世前半までの遺物を少し含む。

それより下層において遺構面が確認できる。遺構面は、基盤層である黄色シルト層上で確認され、調査区の南側へ向かいやや傾斜する。調査区南側には、それらの傾斜に堆積した層が認められる。堆積層中には古代の遺物がまばらに含まれており、従来近辺に推定されていた低地帯の縁辺をとして考えられる。以上から、低地帯が古代の段階において、次第に平準化していった状況が考えられる。現道に沿うような形で低地帯が存在しており、それに対応するように、地形の落ちより南では遺構はほとんど確認されない。

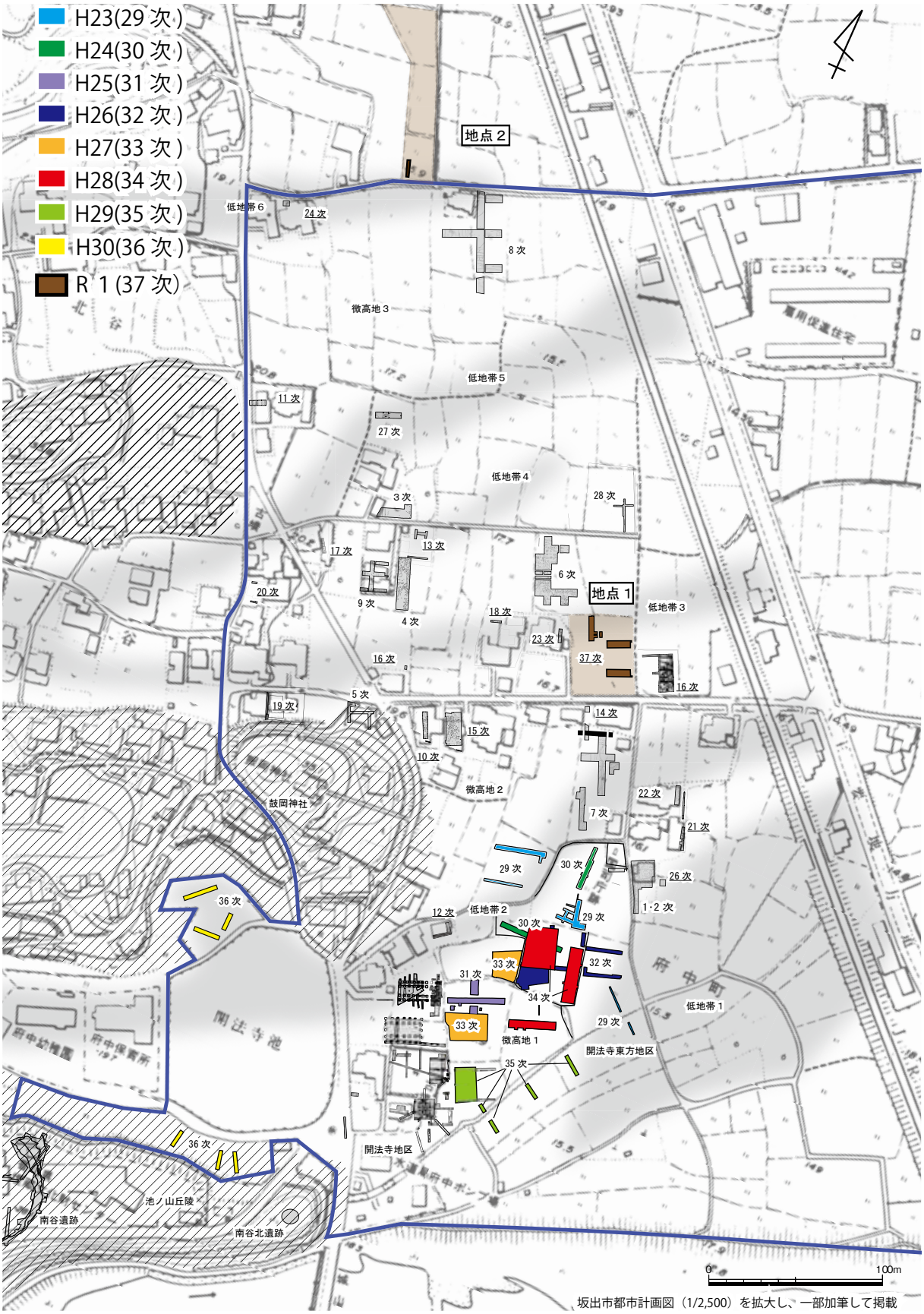
遺構は、柱穴、溝が確認された。柱穴は、平面隅丸方形のものと、円形の小規模なものが存在する。隅丸方形のものは３穴確認され、全体は確認できないものの、柱穴列を構成している。建物を構成する柱穴である可能性が高い。

また、溝も数条確認されている。溝は、柱穴に切られる形で、条里型地割の方向のみでなく、南北方向の溝も確認される。溝は埋土に多量のシルトブロックを含む。遺構の年代については、出土遺物で明確に時期を特定できるものが少ないが､これらの遺構面を被覆する包含層の形成年代や遺構の方位から、８～９世紀のものと考えられる。

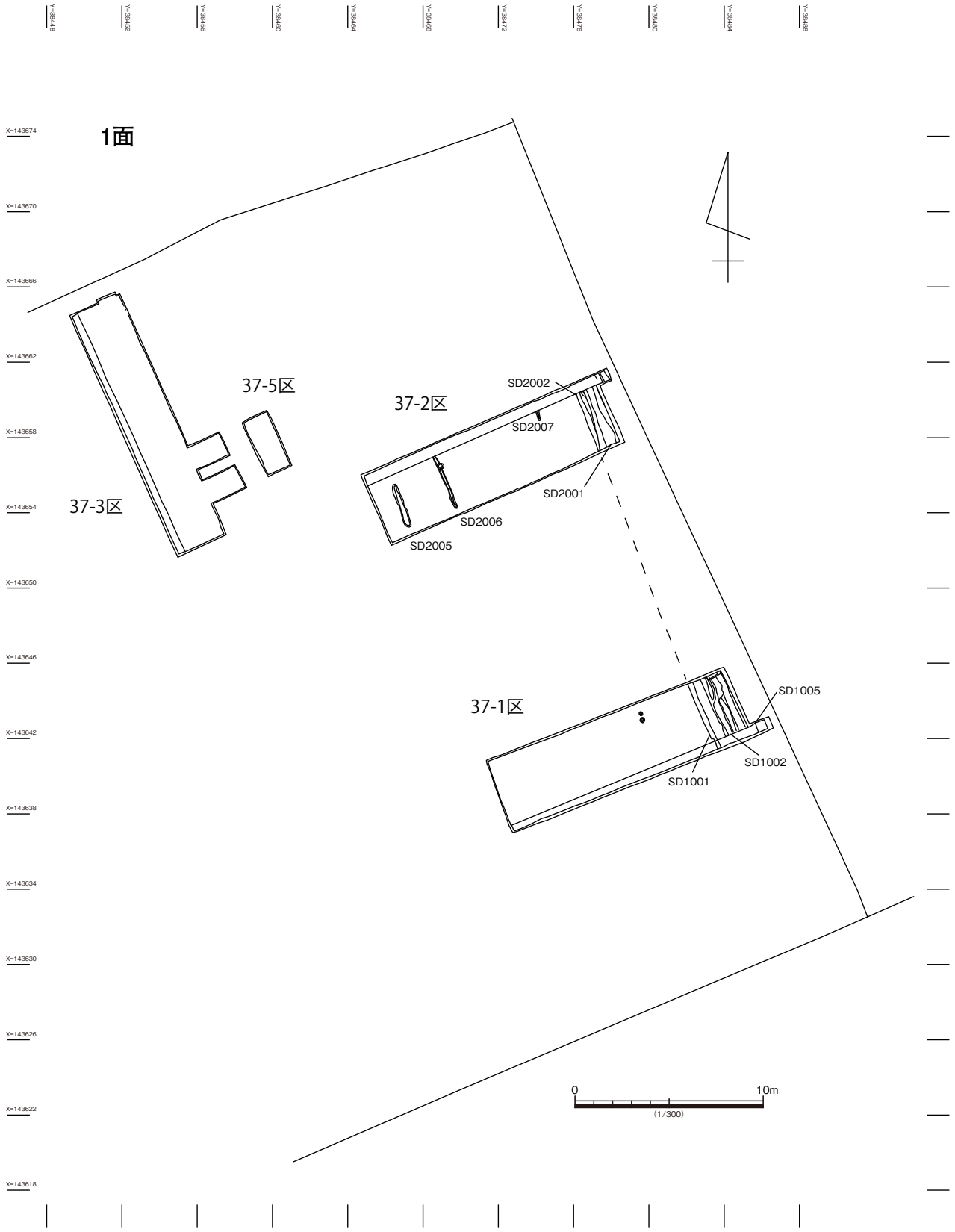
出土遺物については、須恵器・土師器が大半であるが、その中に７世紀代に位置づけられる須恵器等も散見されることからも、これまでの讃岐国府跡での遺構の変遷年代と整合する。

小結

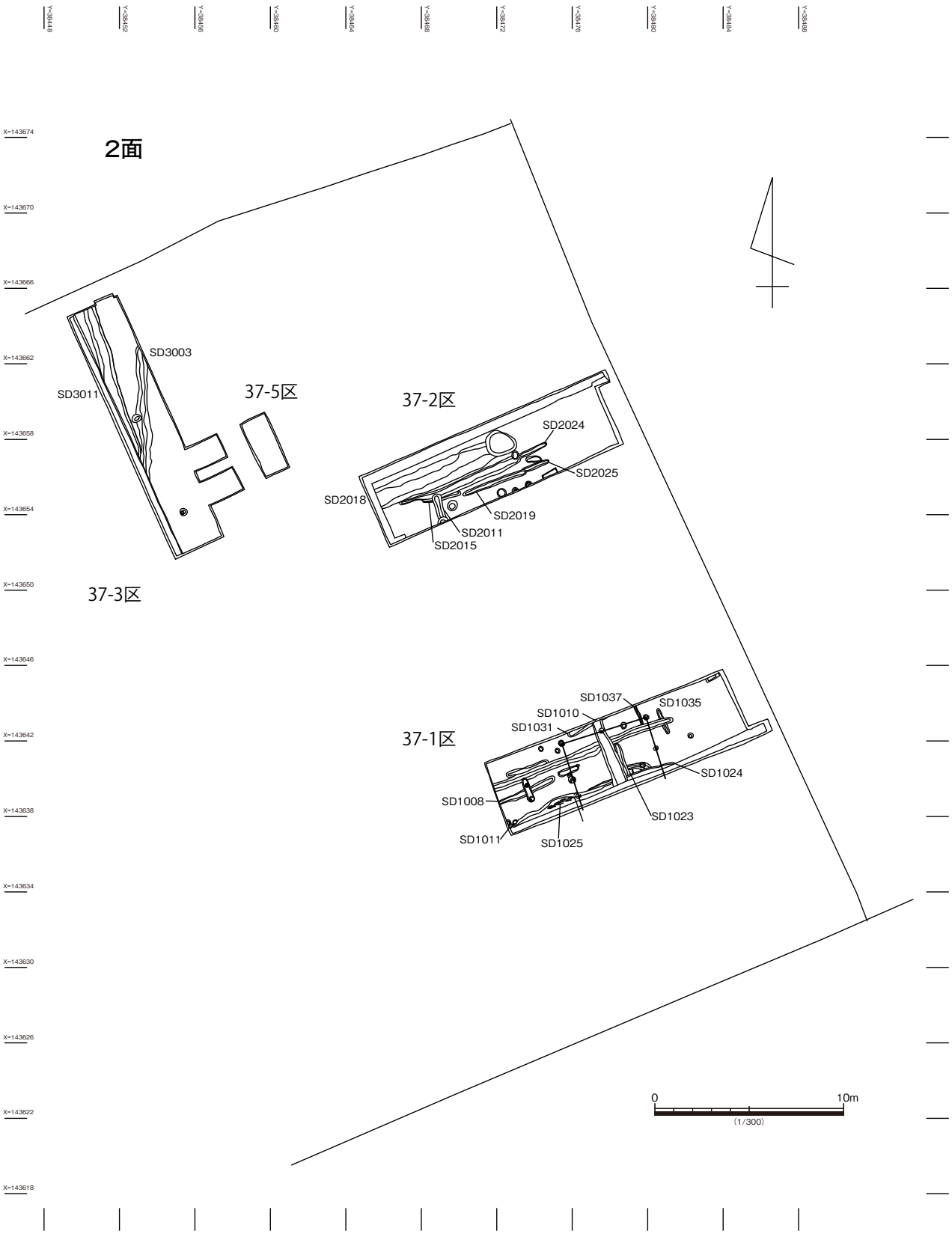
地点２については、調査当初の目的であった８次調査で推定されていた施設といえる遺構は、検出されなかった。ただし、それらの低地帯より上がった微高地上に、さらに古代の施設が展開することが明らかとなり､周辺地形の状況も含めてより具体的に讃岐国府に関連する施設の絞り込みが可能となった。今回の調査でも従来の地形復元に若干の変更を行った。地形状況の再検証も含めた検討により、今後もさらに施設などの絞り込みを行い、解明に努めていく必要がある。（竹内）



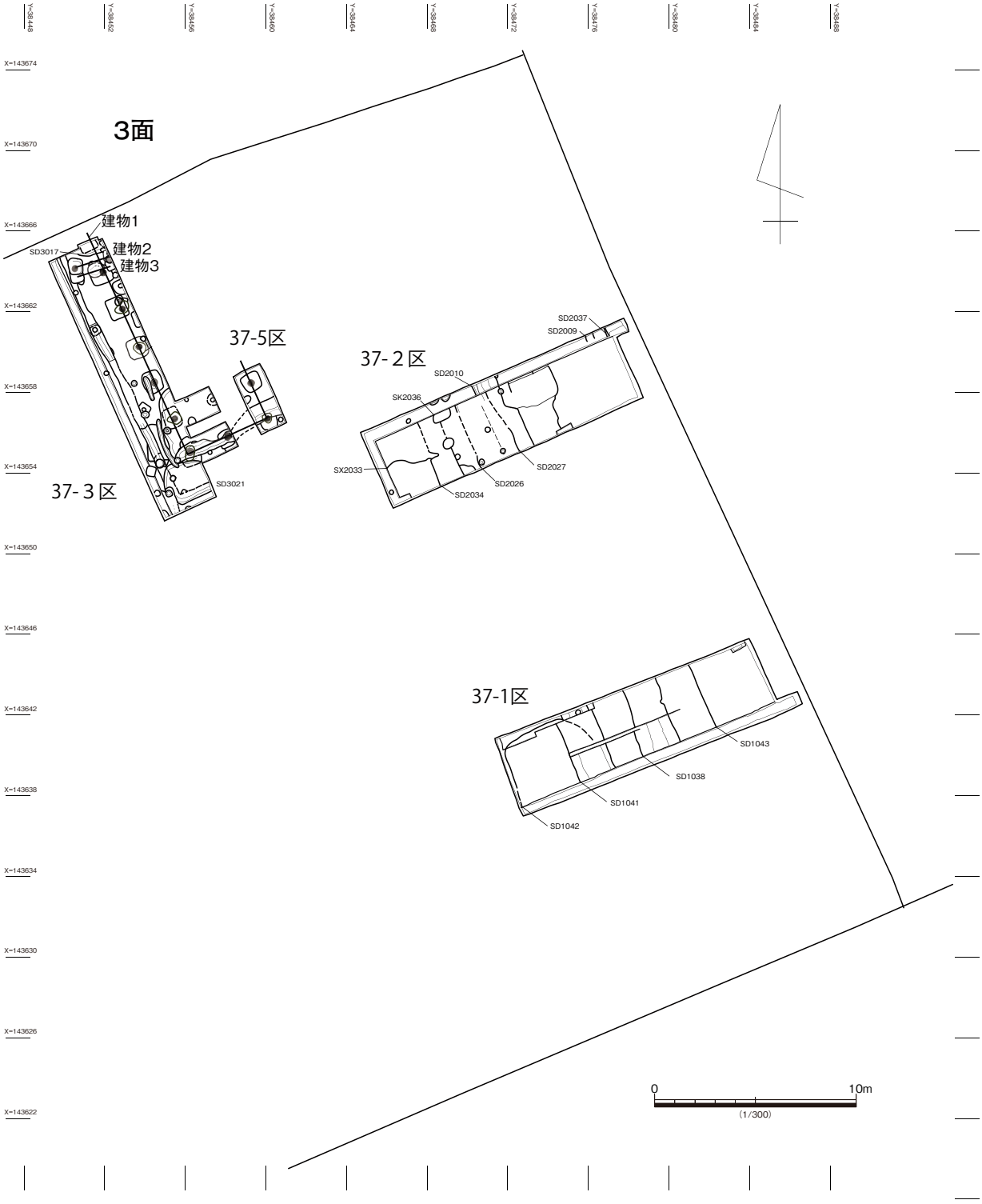
第 19 図　讃岐国府跡調査地



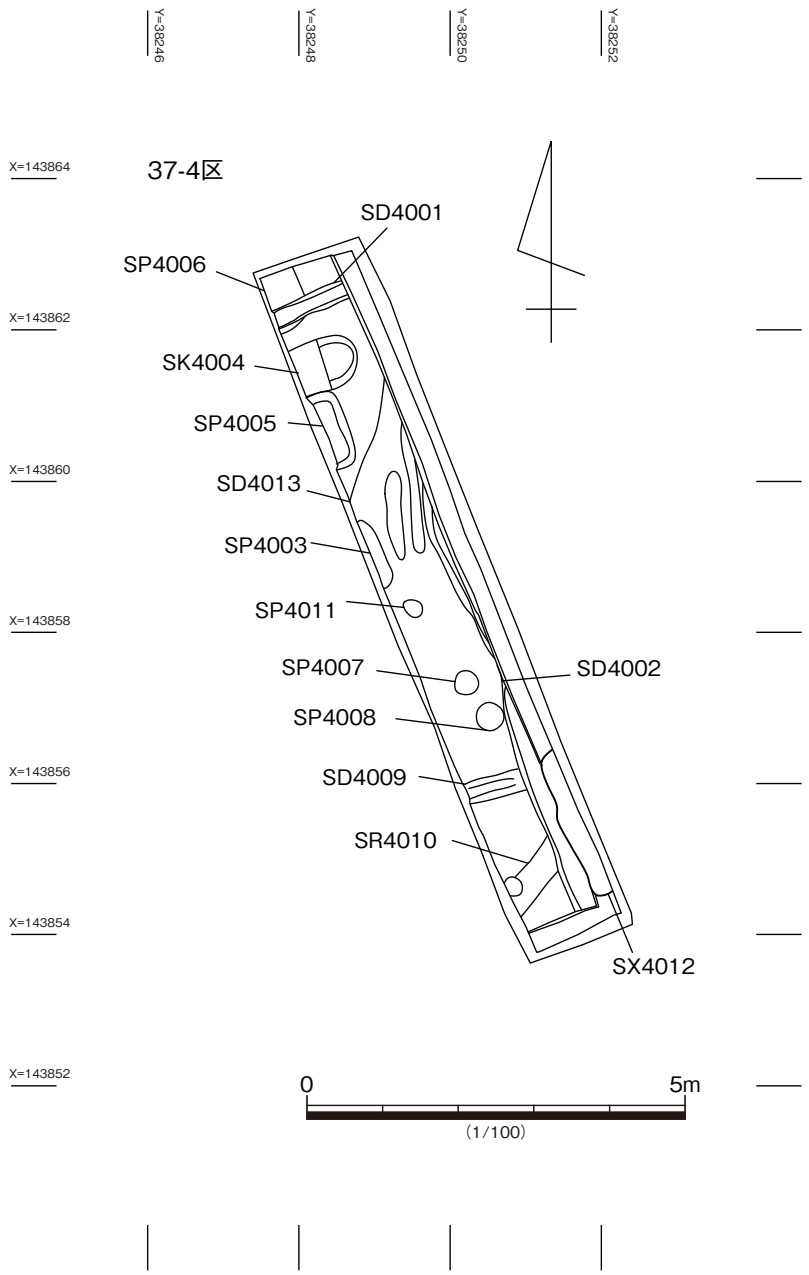
第 20 図　37-1 ～ 3、5 区（地点 1）1 面平面図



第 21 図　37-1 ～ 3、5 区（地点 1）２面平面図



第 22 図　37-1 ～3、5 区（地点 1）３面平面図



第 23 図　37-4 区（地点 2)　平面図

写真 43　37-1 区　SD1042･1038 断面 (南西から)

写真 44　37-3 区　建物 1 検出状況 (南東から)

写真 45　37-3 区　建物 1 柱穴断面（南西から）

写真 46　37-4 区　全景写真 (北西から)